

南方諸地方に於ける

赤禪（あかまわし）について

上 村 六 郎

古い時代から、赤い色の土(顔料)や赤い裂(きれ)などが魔よけのお呪(まじない)に用いられたことについては、これまでも拙著その他に数多くの論考を發表し、更にそれが黄色とともに、最も代表的な魔よけの方法であったこととか、また赤い色が血の不浄や火の威力に深いつながりをもっていることとかについて、既に卑見を、拙著その他で詳しく述べたのであるが^(註1)、日本に於ける赤の魔よけは、たとえば鳳仙花による爪染や、赤小豆(あずき)を用いる赤飯や赤小豆粥の魔よけをはじめとして、いろいろの面で、南方との関係を見のがす訳には行かないようである^(註2)。今ここに述べようと思っている赤禪も、全くその一つの例に他ならないと考えられる。

日本の禪(ふんどし)のことは、これも既に詳しく發表したので略すが^(註3)、今私がここで禪(まわし)と書いているのは、日本の昔からの犢鼻禪(とくびこん)即ち六尺禪や、或は女の人にも用いられる腰巻などをも含めので意味である。つまりその両方に、同じく赤い色が用いられるので、これと南方とのつながりを記して見たいと考えた訳である。

卑見に依ると、そもそもこの六尺禪や腰巻そのものが、恐らくは南方から入って来たものである。「日本書記」などに用いられている「犢鼻禪」の名は、中国の古い時代の名称に依ってはいるが、それが日本に入って、一般に用いられたのは、その名称が中国から伝えられた時代よりは、更に遙かに古い時代であり、それはまさに南方系の服装であろうと思われる。

ところで、日本の本土に於ける赤禪のことを一応記すと、私の全国的な調査の結果から見て、二、三の例外を除けば、海の獵師には、全面的に赤い六尺禪

が用いられていたようである。そして若い女の人の赤い腰券も、殆ど例外なく全国的に行きわたっている。漁夫の他、山で働いた「たたら師」即ち砂鉄の仕事に従っていた鍛冶屋も同様であった。なお、海の猟師でなくとも、船頭さんのように、一般に水に縁の深い人達も、同じく赤い禪をしていたことが明かである。

以上述べたような、日本の本土の調査の結果については、これまでもいくつかの報告を發表しているし、いずれ今後も、まとめたものを公刊するつもりであるが、それ等の源流地とも見られる南方諸地方に於いては、果してどんなふうにそれらの赤禪が生活にとり入れられているであろうか。次にその本論の問題に入っていくと思う。

このことで、まず考えられるのは沖繩である。私は前後2回、1カ月あまりにわたって沖繩を詳しく調査したのであるが、全島、いたるところで、猟師の赤い禪の習慣が見出されるのである。詳細についての報告は、これも別の機会にゆずるが、赤禪が、海中に於ける鱻(ふか)その他の恐ろしいものから身を護るための、所謂厄よけ、もしくは魔よけに用いられていたことは、殆ど例外なく認め得られるようである。

次にビルマについて調べて見ると、ここは赤の魔よけの盛んなところである。かつて報告したように(註2)、爪を赤く染めるのに、インドと同じく、指甲花の木の葉や枝と石灰とを用いているようであるし、また額に紅のしるしを用いて、魔よけとなし、紅のない時は、額を指でつねって赤くしても、同じく有効であると考えているらしい。このことは、その地方にながく住んでいた、私の知人の話である。

ところで、このことと、沖繩の子供の額につける紅のお呪や、日本の本土の幼児のお宮詣の時の額の紅のしるしとの関係などについては、これも既に報告したので略すが(註2)、ここで記したいのは、そのビルマに於ける、赤い禪のことである。

私はビルマについて、未だよく調査していない。しかし本学(大阪女子学園

短期大学)の学長下田吉人博士から、その友人の黒田理氏(前名古屋市衛生試験所技師)のことを伺うことが出来た。それは即ち太平洋戦争中、黒田氏がビルマに行って居られて、その際、次の一句を下田学長に送ってよこされたというのである。

赤禪(あかまわし)しめてビルマの月にあり

もつとも、この赤禪は、果してビルマの人達がやっていたのを習って、自分も試みてやって見たものか、それとも、ビルマの民俗には全く関係なく、自分が出征する時に持って行ったのを、とり出してしめてみたのか、その点がどうもハッキリしない。私はそれを確かめたいと思って、いろいろの方法で黒田氏との連絡を試みて見たが、今もって実現しないままである。ただ考えられることはかりに黒田氏の赤禪がビルマのものでないとしても、ビルマでも、その習慣があるのではないかということである。というのは、まずオ1に、あの辺の風習として、先にも述べたように、赤い色を魔よけに用いることが盛んであるということが考えられる。そして次に、更にもう一つ考え得られることは、一般にあのあたりの南方諸地方一帯が、日本と同じく、六尺禪や腰巻のようなものを用いる習慣があるということである。この六尺禪や腰巻の使用は、一方から言えば、日本の六尺禪や腰巻が、恐らくは南方系のものであろうという私の考え方の、一つの根拠ともなっている訳である。

そこで次にそれ等の南方諸地方の禪や腰巻のことを述べると、まず最初にあげなければならないのは、篠山農科大学教授浜田秀男博士の現地調査の結果である。私は同博士の御厚志によってそのカラー・スライドを拝借して知ることが出来たのであるが、カンボジア北部のモイ族の男の人が、10月の下旬に、二人で裸で写っている写真があり、その二人が、一人は六尺禪をしめて居り、一人は腰巻をしているのである。但しその色は、赤でなくて、日本の昔の浅黄のまわしを思わせるような青色である。

次にあげたいのはメコン河流域を遠くまでさかのぼって調査した、学術探検隊の記録映画である。これを拝見すると、男が赤い六尺禪をしめているように

思われるし、また、その他に、あたかも日本の腰巻のようなものも現われてくる。

今あげた映画の方は、次々と場面が変わるので、充分検討する余裕のないのが残念であったが、次にあげるインドの赤禪のことは、極めて確実に報告し得る例であると思われる。これはインドの仏教遺跡を研究して帰られた、京都大学上野照夫教授にお会いして、事情を告げて特におしらせ願ったものである。即ち同氏のお話によると、インドでも北の方はやや様子は違うが、南の方の男の人は、現在でも、赤い禪をしている人が多いそうである。そしてその型式は日本の六尺禪と一緒であるという。なお、その際に拝見した、マツラの、仏像以前の彫刻の中に、犢鼻禪、即ち日本の六尺禪型のものをした裸像が、明かに見出されたのである。更にこれにつけ加えると、徳川夢声氏が、セイロン島の住民の赤禪のことを、ラジオで話しておられた。

南方諸地方の、禪や腰巻のことに關して、ついでに古い時代の彫刻や絵画のことを少しくあげてみると、まずカンボジアのアンコール・ワットのことが思い合わされる。即ちあの多くの仏像群のなかには、明かに犢鼻禪型式のものが見出されるのである。更にまた、インドのアジャンターの洞窟の壁画を検するに、才1窟の「パドマパニー」を初めとして、才17窟の石柱絵にある「華を持てる菩薩」その他の多くの例に見るように、明かに、腰巻やうのものを腰にまわって、それを紐に依って体に結びつけている。もっともその腰巻の巻き方は日本などとは違って、左まえになっているようである。アジャンター洞窟の壁画に關しては、その実際のものについての研究者である杉本哲郎氏も、「印度古代壁画の研究」に於て、「概して服装は………僅かに禪又は裾、舎勤の類、即ち短かい腰巻に似た衣布をまとうばかりで………」と記して居られる。以ってその大様をうかがい知ることが出来るであろう。

最後に、もう一つ報告したいのは、サイパン島カナカ族の赤い禪のことである。これは滋賀県草津駅前に居られる南新助氏所蔵の、カナカ族の風俗人形を見て知ったのであるが、日本旅行会のお世話役をしていられる同氏は、かつて

サイパン島に居られたことがあり、そこから、カナカ族の造った風俗人形をたくさん持ち帰っておられる。それを拝見すると、その中に、カナカ族の酋長の家族の群像があり、男が赤い禪をしめ、更に両腕にも赤い布を結びつけていることが、この人形に依って明かに知ることが出来るのである。中には、腕に赤い布を結びつけずに、赤い禪だけをしめている者もある。ただ、何の目的で赤い禪を用いているかは、残念ながら聞きとることが出来なかった。しかし、そのもとの意味は、恐らくは何かのお呪いであったのではなかろうかと思われる。なお、昭和32年9月の「週間読売」を見ると、ラバウルに行つて来た人の報告が載っていて、それに依ると、ラバウルでは、儀礼としての女の人の腰巻は、赤い布を用いるとのことである。

以上、私は南方諸地方に於ける赤禪(あかまわし)について、いろいろの見聞を記したのであるが、要するに、卑見に依るに、日本の犢鼻禪(六尺禪)や腰巻の源流は南方にあって、しかもそれに赤い裂を用いるという風習も、また同じく南方系のものであらうと考えられるようである。沖繩に於て、最も南方諸国と縁の深いところは、周知のように、漁港糸満であらうと思われるが、私の調査に依ると、そのの嶺師は、この度の大戦前頃まではすべて赤い禪をしめていて、しかもそれを、日本の本土の人達と全く同じく、一種の魔よけの目的に使っていたのである。これ等の問題についての南方諸地方の現地の調査は、いずれ機を見て、私自身で詳しく行なつて見たいと考えているが、恐らくはこれ等の赤い色についての私の推定は、大体誤りのないところではあるまいかとひそかに信じている次才である。

註1. 赤のお呪いについての拙著並に論考

イ 万葉染色考 47～51頁。

ロ 東方染色文化の研究 235～249頁。

ハ 染色通論 15～22頁。

ニ 南河内滝畑村の山着その他(生活文化研究才4冊)

ホ 藩政末期に於けるある山村の生活(大阪学芸大学紀要才3号)

ヘ 赤について(生活文化研究才5冊)

- ト 色による魔よけについて (大阪女子学園短期大学紀要才 2号)
- チ 蛇頂石について (同前才 3号)
- 註2. 南方に關した赤の問題等の拙稿
 - イ 沖縄の爪染のことなど (おおさか教育才 2巻才 5号)
 - ロ 鳳仙花の魔よけについて (おおさか教育才 3巻才 6号)
 - ハ 赤小豆の魔よけ (琉球新報 1958年12月4日)
 - ニ 紅の歴史を尋ねて (キスミー化粧品会社発行「紅」の中の1篇)
- 註3. 日本の古代の禪に關する拙稿
 - 日本の古代の陰部の「おおい」について (大阪学芸大学紀要才 7号)